資料2

西伯病院の今と今後

院長　高田

理想的には　公立病院であるから　町民の疾患が幅広く診られ、健康づくりに貢献できる病院機能。高度な医療は基幹病院に任せる。中山間地の病院であるから、高齢者の慢性疾患に対応し、南部町の地域包括医療ケアの循環の一部を担う。一方で西部圏域から期待される特徴ある病院を目指す

＜各診療科の課題＞

- 内科の診療分野を広げるためには、呼吸器、循環器等の医師確保が必要だが　現実的には簡単でない。今後は総合診療科への傾斜が進むことが予想される。これに関しては公立病院の役割として整合性はとれるのではないか。
- 外科領域　手術件数の減少　術後管理　化学療法　ターミナルの管理という方向に。
- 整形外科領域　高齢者の抱える運動器疾患など需要は見込める。手術が出来る体制があれば理想　そのためには複数の医師体制が必要。これに関しても現実的には困難であるから、保存的治療を中心に診ていく事になるのではないか。
- 小児科　患者数が見込めない。町の医療施策（現在明確なものはない）との整合性は？
- 精神科　外来件数は変わらず救急対応も維持（精神科救急輪番に組み込まれている）
  入院患者数の維持をどう図るかが課題
- 歯科　公立病院として整備の是非は

こうした状況を踏まえると

- 病床機能は今のままでいいのか？　急性期医療が徐々に縮減していくのでは？
- 11診療科の運営　このままでいいのか？
- 規模の縮減は必要ないか？
- ２次救急は堅持　そうしないと町立病院としての身近な医療の存在感が希薄となる。

＜動き＞

- 近く大学を含めた病院連携協定に加わる。病院間の連携を取って患者の受け入れ、医療提供をより効率的に行う、という趣旨。
  入院　転院　といった事がより機動的に行える連携を目指す。

⇩

当院をとりまく医療環境の変化に伴う様々な課題があるなかで、「医療の質の確保」と「経営の安定化」という両輪を満足することは、今後、極めて困難となっている。町の医療施策としての西伯病院の存在意義の確認が必要。